

令和7年度 データサイエンス・AI リテラシー教育プログラム 自己点検・評価(短大版)

評価日時:令和8年3月25日

開催場所:武庫川女子大学中央図書館棟

目的:令和7年度の「データリテラシー・AIの基礎(リテラシー教育プログラム)」の自己点検・評価

評価項目:文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベル)」

自己点検・評価の視点	内容	点検・評価結果
学内からの視点		
プログラムの履修・修得状況	令和7年度は再履修者が履修し、後期の単位修得率は75.0%であった。「データサイエンス学習支援ルーム」では、出席状況に応じて学生に連絡をとることに加え、必要に応じて面談を行い、単位修得に向けた支援を行った。	今年度は再履修生のみ履修となったことから、短大生のみ単位修得率について前年度との比較はできない。大学・短大を合わせた再履修生の単位修得率が39.3%であったことから、短大生(卒業学年)の単位修得率75.0%はそれより高く、個々の学生への連絡に加え、面談の実施による継続的な支援が効果的であったと評価できる。
学修成果	「データリテラシー・AIの基礎」では、毎回、授業内容の理解度、教材や課題の適切性についてアンケート調査を行った。また、学内の教務システムを利用した授業アンケートでは、実践的な演習を通じたスキルの獲得、確認テストによる理解度の把握、AIやデータリテラシーなどこれからの時代に必要な知識を幅広く学べる有益性などが成果として挙げられていた。	各種のアンケート結果より、概ね高い評価が得られているが、授業動画の配信クオリティに関する要望が一部あったことから、来年度は学生の要望を踏まえた対応が必要である。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	前項に記載した毎回のアンケート調査において、授業の理解度は7割から8割前後が「よく理解できた」、「だいたい理解できた」と回答していた。また、理解度のばらつきが昨年度と比較して小さくなった。課題の難易度は「適切である」との回答が大半であった。確認テストの正答率が7割を下回った問題が令和6年度は全体の13%だったのに対し、令和7年度は9%と減少しており、確認テストの難易度については適切に設定できていたと考えられる。	少数の意見ではあるが、授業回によっては難易度にばらつきがあるという声もあることから、今後も学習成果を測るために適切なレベルでの確認テストの問題作成に努める必要がある。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	「データリテラシー・AIの基礎」は全学必修科目であるため、本学の入学者は全員受講している。今年度以降、短大の履修生は再履修生になる。	—
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	前項にあるとおり、短大の履修生は再履修生のみになる。	—
学外からの視点		
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	プログラム修了者の進路について、効果測定が可能であるが、卒業生の活躍状況について、企業等からのヒアリングはできておらず、引き続き令和5年度以降の卒業生の進路状況について調査を行っていく。	卒業生の進路について、就職先に変化が見られたのかどうかをキャリアセンターと連携しながら調査・検証を行っていく必要がある。また、卒業生は全員が修了者であることから、卒業時アンケートの結果等を踏まえて多面的な評価を行っていく必要がある。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	生成AIの進化が加速度的に進む中で、生成AIの活用や倫理的な面が課題になっている。また、データサイエンスを学ぶことができる大学が増えている中で、産業界はどのような人材を必要としているのかを注視して、今後の授業内容に反映していく予定である。	産業界との連携は引き続き課題として残っている。令和7年度の共通教育カリキュラム改革におけるアドバイザー会議(有識者会議)の場では、生成AIとの付き合い方を学ぶ機会(プロンプト、検証、引用・著作権、限界の理解)が必要との意見があった。本科目だけではなく、共通教育科目・大学全体のカリキュラムとして、AI・データサイエンス領域の人材育成をどのように行っていくのか、産業界の要望を踏まえた全体像を示す必要がある。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	履修者が再履修生であることから、継続的な履修の支援に加え、学びの姿勢を体得してもらうために、必要に応じて面談を行い、その意義を伝えている。	再履修生の特徴として、欠席過多になる傾向があることから、データサイエンス学習支援ルームによる積極的・継続的な支援を行っていく必要がある。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	今年度は授業の理解度について、各授業回のばらつきが昨年度と比較して小さくなっており、改善の成果が表れている。今後も「分かりやすい」授業をめざしながら、授業動画の配信クオリティを上げていくことで、授業の水準の維持・向上に努める。	オンデマンド授業であるため、授業動画のクオリティも学習意欲や学習成果に関係してくる。全学必修科目であるため、今後も授業の内容と水準の維持・向上に努める必要がある。